

思

考

の

隅

景

京城帝国大学に朝鮮語担当者として小倉進平が派遣された1926年に先立ち、1921年に発足していた朝鮮語研究会が1931年に名称を変更して再発足したのが、朝鮮語学会だった。これは韓国人のみからなる学術団体であり、その当面の目標には韓国人による韓国人のための「国語(クゴ)辞典」の編纂があげられていた。具体的には、ハングル表記法の統一案の取り纏めと、標準語の査定作業が平行して実施された。人脈からみれば、そこには周時経と直接・間接に師弟関係にあった基督教(改新教)系列の、延禧、培花、梨花などの専門学校教師たちが中心的な役割を果たしていた。その彼らが1942年に弾圧の対象となったわけだ。編纂中の原稿は没収され、戦後刑務所の地下から発見されることとなる。

「朝鮮語学会事件」で最重刑に処せられた3名の略歴を見てみよう。最高刑の懲役6年を求刑された、学会幹事長李克魯(1893-1978)は、1931年の学会創立の中心人物のひとりで、自宅に学会事務局を置いていた。20年代ベルリンで経済学を、ロンドンとパリ大学で音声学を修める。南北統一政府の樹立を訴えた彼は、1948年に金九とともに平壤の南北会談に参加したまま北に残留し、周時経の弟子、金木斗奉と並び北側の代表的国語学者として生涯を終えた。

4年の懲役刑を受けた延禧専門学校教授、崔鉉培(1894-1970)は、1919年に広島高等師範学校の国語・漢文科を卒業のち、京都帝国大学で哲学と教育学を修め、延禧専門学校助教授として赴任するも、38年興業倶楽部(基督教系独立運動団体)事件に連座。周時経の直系の弟子にあたり、漢字で自分の名前が記述できることを苦にした、といわれるほどの、徹底的なハングル専用論者。漢字では表記不能なウリマルこそが、崔にとってのあるべき「国語」の姿だった。戦後ただちに米軍政に編集局長として参加し、「国語」の復権を主導した崔は、朝鮮語学会の後身であるハングル学会の理事に就任し(1949)、ハングル専用運動の中心に位置した。

## 朝鮮語学会事件再考

「日帝」支配下の民族意識と国語問題・下

梨花女子専門学校教授だった李熙昇(1896-1989)は2年6カ月の刑を受けたが、戦後韓国の国語学の基盤を築いた国語学者として名を残す。1930年に京城帝国大学朝鮮語学及文学科を卒業し、小倉進平の下で朝鮮語学を専攻した最初の韓国人学生だった李は、1940年より42年にかけて東京帝国大学大学院に留学し、言語学を専攻した韓国人の最初のひとりでもあった。戦後は崔とともに米軍政に参加するとともに、「国語」再建に寄与するとともに、京城帝国大学の後身たるソウル大学の国語国文学科を中心に、韓国における国語学の基盤作りに尽くした。ハングル専用主義者の崔鉉培とは異なり、ハングルと漢字併用路線に好意的な立場だった。

1933年には在日中の詩人、金素雲(1908-1981)が全文ハングルによる『諺文朝鮮口伝民謡集』を、新村出、田村杏村らの後援を得て刊行している。ここまで述べてきた韓半島における「国語」意識の伸長のなかに、その業績を置き直してみると、どうだろう。民族の言葉を奪われた経験が国民意識の高揚を招く経緯が、そこには鮮やかに浮かび上がるようにも思われる。だが戦後軍政下で「親日」のレッテルを貼られたこの詩人が、ハングルにおける「国語意識」の芽生えや展開のなかで言及されることは、皆無といてよい。また現在の韓国の若手日本語学者たちの多くは、「朝鮮語学会」や、自分たちの先達の営みに、さして興味を示さないという。翻って韓国人ならだれでも教科書で知っている「朝鮮語学会事件」を知る日本人の数も少くはないだろう。言語には、民族を暴力的に分断し、あるいは統合へと誘う魔力が宿っている。その振る舞いに無意識に加担する幼稚さは、容易に克服できるだろうか。上田万年の「国語と国家」(1894)の根底的な批判には、韓国の現実の吟味が欠かせまい。

\* 李康民・漢陽大学教授の論文『『国語』の境界』および同教授との議論に触発された。機会を与えられた韓国日本学連合会、第2回国際学術大会(7月8-10日)関係者、とりわけ李漢瑩先生に深謝申し上げる。

国語日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授  
稲賀繁美